

◆今年も終活の準備年の予定だったのだが、何一つ予定通りいかなかった。昨年末にすぐ下の弟（次男）の妻がくも膜下出血で倒れ、日赤病院に救急搬送されて入院後に間もなく死去し、一月四日葬儀。さらに、その下の弟（三男）が脳梗塞で倒れて日赤に入院し、約一ヵ月でやや回復したので、その後リハビリのために転院をくり返した。そして四月、老人会の新会長にバトタッチをして、それまで私が代行だったのを新会長に全てを託したはずだったのに、胃ガン悪化で死去してしまった。また新会長の選出などで一ヵ月が過ぎ、五月末でやっと自分の用事が出来るまでになってひと安心という状態になった。が、それまでやり残したものがあまりにあるので、未完のものを完遂するには一定の時間が掛かると思うと、気が重い現状である。

池田桂一

◆嵐が過ぎて、急に冬の到来となった。外は何となく車の音や通りの話し声なども、あまり聞こえなくなったような気がする。これからがawatadadしくなるだろう。残りの仕事の片付や冬仕度などのくり返しで、この一年も終りに近づいた。先日、友達に「展景」を送ったら返事が来て、「年を取ったね」との一言に、その通りだと自覚している。気負わずに有りのままでもいいのだ。移りゆく自然の景色やまわりを眺めながら、新しい年を迎えよう。

市川茂子

◆東京に近いローカル線に乗るのを楽しんでいると川本三郎さんが書いています。近鉄（ちかてつ）とこののだそうです。小駅を下りて歩くのもいいと。思い立って、秩父鉄道（寄居駅）を、熊谷寄りに乗り、熊谷乗換、終点の羽生まで乗り、下車、歩いて、田舎教師（田山花袋の小説のモデル）の墓、毘沙門堂をみました。（東武）伊勢崎線で久喜まで、宇都宮線で大宮まで、京浜東北線で北浦和下車、県立近代美術館で「ディエゴ・リベラの時代」展をみて、あと、埼京線などで帰宅しました。すべて県内ではありませんが、一日がかりです。戻ってきます。

小野澤繁雄

◆十月の下旬だというのに台風21号が日本列島を縦断した。今々炬燵でも出そうかという山形ではあまり例がない超大型の台風であった。記録では、上陸日時が一年の中でもっとも遅い台風として歴代三位だそうである。全国で七人の方が台風の犠牲となった。ご冥福をお祈りしたい。朝晩の寒さとともに白菜が玉を帯び、大根も急に太くなり出した。農作物の持つ体内時計とでもいうのだろうか、時期を心得た成長には人間を超えた何かがあるような気がしている昨今である。

神村ふじを

◆今年の赤坂迎賓館の一般公開を申し込んだ。ここは、私が高校生の時は、国会図書館であり、勉強するなら誰でも入れた。戦前は赤坂離宮であったから、建築マニアの父は私を弾むように連れていってくれた。広いホールに大きなテーブルがあり、向かい合うように椅子があった。周りは書棚で難しい本は出し入れ自由であった。戦後は手入れも行き届かなかったものの、私は専ら大きなシャンデリアに見とれていた。明治三十二年に当時の東宮御所として建てられ、その後、赤坂離宮として昭和、今上両天皇も

滞在なされたようである。昭和三十八年に改修工事が始まり、四十九年に国賓を迎え、首脳会談や晩さん会のための迎賓館として完成したが、今も修復が行われている。建物は、ネオ・バロック様式で、内部の装飾や家具などはフランス十八世紀頃のフランス古典主義（ルイ十六世様式）や革命後のアンピール様式が巧みに取り入れられている。明治時代の欧州文化への憧憬が実感できた。平成二十一年には本館、正門、主庭噴水池が明治維新以降の建造物として初めて国宝に指定された。

河村郁子

◆大冊、石牟礼道子さんの『春の城』を読み始めて一カ月。『春の城』は一六三七年、九州の島原・天草地方の乱をテーマとする。廃城になつていた「原城」にたてこもつたキリシタン三万七千人の大半は、餓死者の続出する大凶作のさなかも、苛酷な重い年貢をゆるめぬ藩の圧政に苦しむ「文字なき」農民と、少数の庄屋と禄を離れたさむらいたちであつた。九州各地の大名と幕府から送られた軍勢十二万が城を囲む。家族の女、子供、老人たちも城中にあつた。皆ふつうの人々。天草四郎もヒーローではない。一人一人に寄り添い、その生活と魂を語る文章はあくまでも静かで美しい。城中の抵抗者は、赤ん坊に至るまで最後は殺された。時間はかかるが、読者が一人でもふえるといいな。ノーベル文学賞にも値する作品と私は思うから。

河内愛子

◆今年台風が多くあり、秋晴の少い十月であつたと思います。何か損をした気持ちになっています。これから名誉挽回してもらいたい。後二カ月で今年も終ろうとしています。来年もよい年でありますよう祈っております。

谷垣満壽子

◆十月のある通勤通学の時間帯、地域で年一度回ってくる交通安全の立ち会いをした。相手は昨年と同じく五十代の中堅農家。今年の作物の出来について、いくつか聞いてみた。コメは山形県の発表ではやや良とされていたが、この辺はかつてない不作だつたという。ソバは花が実になる頃雨にたたられてほぼ全滅、エダマメは実の入り具合が不揃いでこんなことは余りなかつたとのこと。来年四月に廃止される種蒔法については、農家には何のメリットもなく、むしろ心配なことばかりと答えてくれた。農協出荷の農家と一人で細々と有機農業をやっている私とはまず話す機会がないので、貴重な時間だつた。

新野祐子

◆この前の七月、足を滑らせて後ろに倒れかけ、柱の角に後頭部をぶつけて、十四針縫うほどの怪我をした。一週間ぐらいで傷口はきれいにつき、傷口を留めてあつた糸と言うかホッチキスの針のようなものとれたが、そのあとの赤みがとれない。赤みがあるうちは美容院にいったはだめ、と医師に言われ、髪は伸び放題、白髪頭を振り立ててなんとも情けない状態である。

松井淑子

◆天候不順が相変わらずで、今回暑かつたり寒かつたり、梅雨のころのようにじめじめしたりで嫌な日が多かつた。ちよつと驚いたのは、昨日は暑かつたのに、今日は上着を一枚はおつて寒さを凌ぐ、という今までに体験したことのない日があつたことだ。ちよつと植木屋さんに入ってもらふところで、なかなか日が定まらず予定がたたず参っているんですよ、と言つていた。ことしは海流の変化もあり気になる。

丸山弘子



◆矢部太郎さんという芸人さんが描いた『大家さんと僕』というエッセイ漫画が面白い。一戸建ての二世帯住宅の一階部分に一人暮らしする大家さんと、外玄関から出入りできる二階部分を借りることになった僕との日常物語。二人の会話、距離感、社会に開かれている心の在り方等を通じて、笑いながらも深く考えさせられた。身寄りの少ない私の、これからのヒントになりそうな一冊である。

山内裕子

◆夏が終わると急に年の暮れを意識する。一年の終わりが近いと毎年のように急に思う。そしてしようと思いつながら、まだ成し終えていない事柄をあれこれと思い悩む。この時期になると急にそう思うのは、夏の暑さは苦手だが、夏はやはり生命力に溢れた季節だったからであろうか？ 四季のある日本の季節の移ろいは、人の心のありかたにも微妙な差異を与えているのであろう。

結城 文